いちごパフェ

荒木春彦

いちごパフェ

 駅に続く地下街に、その喫茶店がある。規模は決して大きくない。店の名前もよくある名前で
、明日には忘れてしまいそうなほどよくある名前だ。
今その店は、お昼の殺人的混雑を何とか今日もくぐり抜けた後だった。店員だけでなく、まるで
店全体がホッと一息ついてるような時間帯だ。
「いらっしゃいませ」
一人の男がふらりと店に入ってきたのは、そんな時だった。

「いちごパフェ、もらおうかな」
男は入ってくるなり、椅子に座りかけながらメニューも見ないで注文した。
「かしこまりましたぁ～」
店員の若い女性は伝票に素早く何かを書き込むと、カウンター奥の調理場へ向かった。

「またあのおじさんが来てます。やっぱりいちごパフェ一つで！！」
女性店員は眉間にしわ寄せながら、そっと店長に注文を告げる。
「そう変な顔するなよ。別におじさんが甘党でもいいじゃないか」
店長はバイト店員の、年齢にふさわしい嫌悪感を優しくいさめる。
同じおじさんと呼ばれる人間として、助け舟位は出してやろうかとも思った。
「でもでも、いつも注文は絶対にいちごのパフェじゃないですかぁ～。な～んか気持ち
悪い！！！」
バイト店員は、きっと親にもそういう風に話しているのかなと思わせる甘ったるさで、店長に訴
え続けた。
「まぁ、素直にいちごパフェが好きなおじさんなんだよ、きっと。」
店長はそっとバイトにお冷をくむように目配せしながら、生クリームを冷蔵庫から取り出す。
そう、あのお客はいつもいちごパフェを頼むのだ。それは店長の方が良く知っている。
店の一番隅の窓側の席で、パフェを独りでゆっくりゆっくりと時間をかけて食べるのだ。ま
るで、嫌いなものでも食べるみたいに、ゆっくりゆっくりと・・・。
昼の忙しい時間帯ならともかく、バイトの子のまかないを作ってやる位で、たいしてする事もな
いこの時間帯には差しさわりがない客と言ってよかった。

「おまたせしましたぁ～」
バイト店員は一応愛想よく、いちごパフェを客のテーブル中央に置いた。しかし不自然にすぐに
調理場に引っ込んでしまう。
「あ、ども」
客が言う返事は、店員には届かない。

「んで、超味わってゆっくり食べて長居なんですよねー！」
バイト店員は店長のたった今作った出来立てのピラフを、勢い良く食べながら勢い良く喋った
。
「ははは、レンちゃんは随分あのお客さんが気になるんだねえ」
「だってぇ、何だか不味そうに食べません？あの人。本当にパフェ好きなのかなぁ～って。あ

、でもその割には残さないで全部食べるんですよねー」
レンちゃんと呼ばれた店員は、豪快に皿を口まで持っていって最後のピラフをスプーンで勢い良く送り込んだ。
「そんなに慌てて食べなくても良いのに」
店長はいつもながらに行儀の悪いこのバイトの親は、自分と同世代なんだろうなあと考える。
「だってぇ、ゆっくり食べたら冷めちゃうじゃないですか～」
悪びれもせず、ガチャガチャと皿とスプーンで音を立てている。
「ははは、そりゃそうだ」
店長は躾という漢字を思い出そうとしたが、思い出せなかった。

「いらっしゃいませ～」
ピラフを平らげたばかりでレンはさらりと大きい声を出した。
「後藤さん？珍しい所で逢うなあ～」
入ってきた客はレンを見もしないで、隅の席でパフェと格闘している客に話しかけた。
「あれ？松井さんこそ、どうしてこんな街に？」
隅の席の客も、レンを見もしないで話を続けた。
「ご注文お決まりになりましたらお呼び下さい」
少しムッとしてレンはぞんざいにメニューを松井に渡す。
「あ、アイスコーヒーを一つ」
メニューを開いて、まるでそれを探しあてたかのように注文をする。
「かしこまりましたぁ～」
やはり素早く伝票に何かを書きつけ、調理場へ引っ込む。

「いや～私のほうは帆場絡みの出張でしてね。後藤さんは今日は非番じゃないんですか？」
「非番だよ。だからこんな街まで来られるんだもの。」
「それにしても、それ、いちごパフェでしょ？後藤さん非番の日は甘党なんですか？」
「やだなあ。俺はいつでもアルコール党だよ」
「じゃあなんで、今はパフェなんです？」
「・・・・・難しい質問だなぁ。俺も頼みたくないんだよ。」
「後藤さん？」
後藤はそっとパフェ用の長いスプーンを机に置いた。まだパフェは半分以上残っている。

「・・・ここで、このいちごパフェを頼んで一緒に食べたのが最後だったんだ。」
「誰とです？」
「・・・・・・・・。これはね、松井さん。儀式なんだよ、俺の儀式。」
「儀式、ですか？」
「前にも話したかもしれないけどね、俺は悪い奴ってのは・・・純粋に悪い奴ってのはいないと思ってるんだよ。」
「いや、聞いた記憶ないです。」
「あぁそう。まぁつまり人間ね、オギャ～って生まれた瞬間からの犯罪者ってのはいないわけよ。育っていくうちに、犯罪と犯罪じゃないものと区別が出来てくる。」
「ええ。」

「そして、その犯罪と呼ばれるものを実行するかしないか、という選択肢がまた出てくる。つまり、どんな環境で育とうと、どんな性格の奴だろうと犯罪を犯罪と解かって、そして実行する。そうすると悪者になって、我々が逮捕する人間となるわけだ。」
「ええ。」
「つまり逆に言えば、悪者にならなきゃ逮捕はされない訳だよ。どんなに悪い事を考えたって、思いついてたって、実行しなきゃ捕まらない。そして実行したら、必ず被害者は出るわけだ、必ずね。・・つまり我々警察ってのはさ、悪者が発生してからの仕事なんだよ。いつも後手なんだ。手遅れの職業なんだよ。」
後藤は手元のスプーンを見つめたまま、一言一言噛み締めるように話す。
「それと儀式とどう関係するんです？」
「・・・・俺の仕事が無力だってことを知るための儀式なんだ。」
後藤は再びスプーンを持って、いちごパフェを睨みつけて食べ始めた。

松井は氷が少し溶け出したアイスコーヒーにそっと口をつけた。
後藤という人を知ったつもりでいたが、まだまだ情報不足かな・・それとも全て知らない方が良いのだろうかと迷いながら。